

雑多な街、吉祥寺の 魅力を取り戻してほしい



いしかわじゅん

1951年、愛知県豊田市出身。漫画家、漫画評論家、小説家。ほかにも俳優としての映画出演やテレビではコメンテーターを務めるなど幅広く表現活動を行っている。毎年夏には吉祥寺のギャラリーで開かれる「30人のクリエイターによるTシャツ展」に参加。現在、吉祥寺を舞台に「勤め人ではない人々」の人間模様を描く漫画『吉祥寺キャットウォーク』を連載中。

漫画や評論をはじめ意欲的な表現活動が続けるいしかわじゅんさんは、1970年代初めから吉祥寺に暮らし、街の変化を見つめてきました。この街が好きだからこそ言える、辛口のコメントもいただきました。

吉祥寺に住み始めたのは大学3年生のときだから、今年で足かけ40年ですかね。当時は、新宿に人が集中し過ぎて飽和状態になり、高円寺、吉祥寺、国分寺の「三寺」にも若者が集まり始めていました。吉祥寺も面白くなりかけていた時期です。

当時の吉祥寺は、「こじんまりとしていましたよ。小さな店が多くてね。文士の街なんて言われて、作家もけっこう多かった。金子光晴が歩いていて、おつと驚いた記憶があります。

70年ぐらいいから関西で歌っていた連中が中央線沿線に住み始めたんですよ。吉祥寺に「ぐわらん堂」という喫茶店があつて、歌い手だけでなく、編集者、イラストレーター、詩人、デザイナーが集まっていた。毎日のようにいろいろな連中と朝までなんだ、かんだと話していましたよ。居心地が良くて、卒業するまで入り浸りです。勤め人じゃない生き方もあることもこの店で学びました。

卒業後は地元の愛知で就職したけど、働いていることの意味が見出せなくて11カ月ほどで再上京です。そのうち結婚して子どもが生まれ、環境が良い吉祥寺に戻ってきました。

この街は、とても便利です。漫画を描くには、特別な画材が必要だけど、当時から吉祥寺には大きな画材店が2軒もありました。漫画家はと

ても忙しい職業なんです。だから、吉祥寺のように歩いて行ける距離に、買い物する場所も、遊ぶ場所もそろっているのは便利です。

昔と比べると最近は家賃が高くなって、若い人たちが小さな店でも出せないようです。街の魅力っていうのは雑多なものがあるっていうことでしょう。でも、今の吉祥寺は同じような店ばかりになってしまったね。毎年夏に参加している「Tシャツ展」なんかもあるけど、文化はいろいろなものがあるから生まれるんです。もともと好きで、住み続けてきた街だからこそ、本来の魅力を取り戻してほしいですね。



PRESENT

今回取材した、いしかわじゅんさんの直筆サイン入りコミックを抽選で5名の方にプレゼント！詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。

